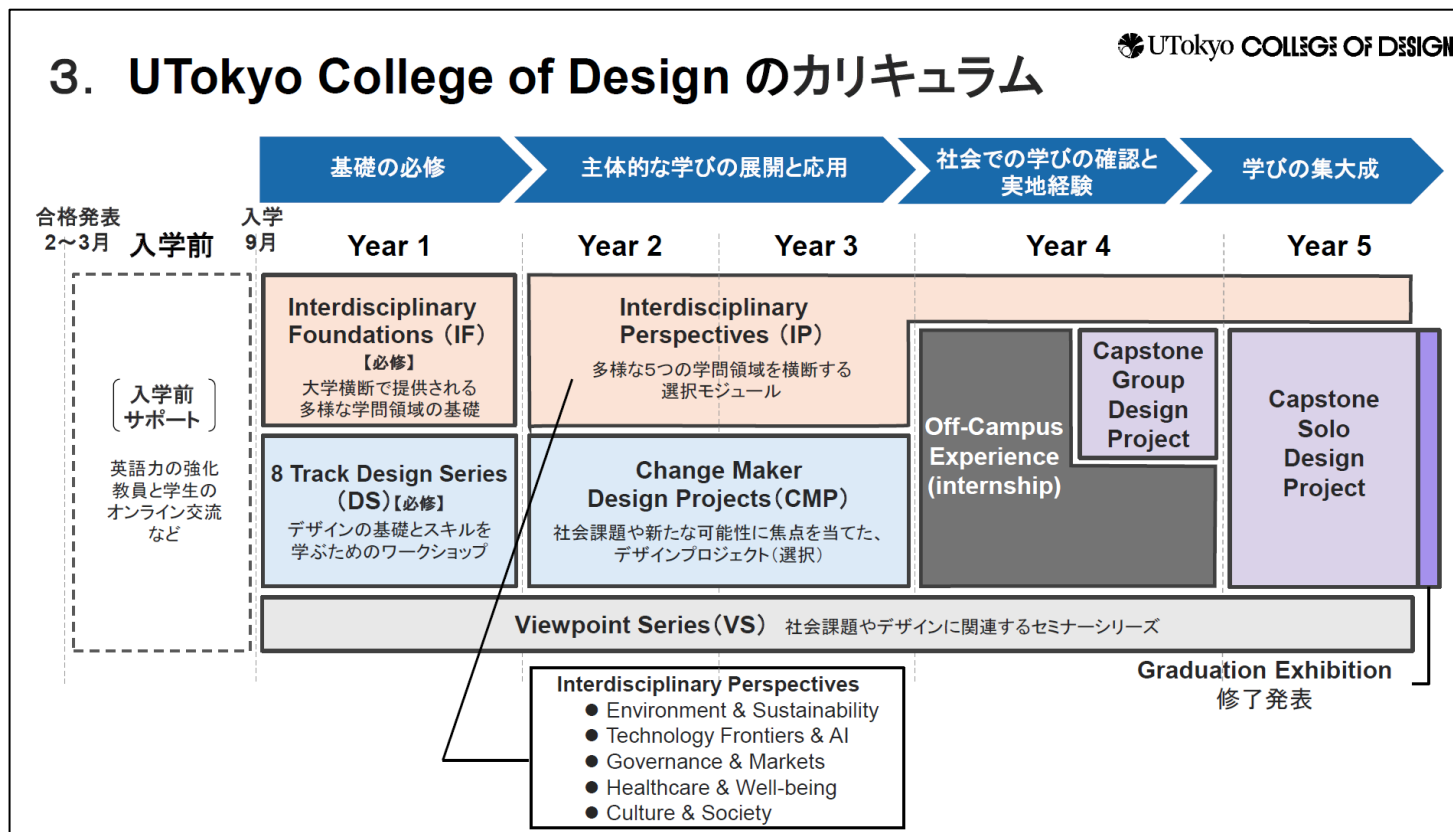


申請計画のポイント

- 多様で複雑かつ多層的な現代の社会課題に対し、**分野横断的な知とデザインを融合しながら新たな価値を創造し、社会に変化をもたらし得る人材**の輩出が必要
- 東京大学が擁する広範かつ多様な学術知を基盤として、5年間で修士課程段階の学修成果に到達させる高密度な教育課程を実現し、上記の高度人材を一定の規模をもって継続的・組織的に輩出**することで、社会に実質的なインパクトを生み出す
- 入学者選抜の段階から**高レベルの学びを遂行できる人材を見極めた上で、学士・修士段階を一体として設計した教育課程において、基礎・展開・実践・統合を短い周期で往還**させる



連続課程特例認定大学の認定について（東京大学）

○認定日

令和8年7月24日

○実施期間

令和9年4月 ～ 令和19年3月

○附帯条件（留意事項）

1. 本申請計画における学部との連続性に配慮した教育課程について、**当該教育課程において教育を受ける学生や、修了者が活躍する場である社会**に対し、**5年間の課程がもたらす利益について情報発信**を行い、今後入学を希望する者やその保護者も含め、**広く社会の理解を得るよう努める**こと。
2. 東京大学が本申請計画において掲げる「**Design**」について、本申請計画による教育・研究の成果を通じて、**国内外も含めて積極的な情報発信を行い社会への定着を図る**よう努めること。
3. 広義のデザイン学の学術的発展及び教育体系の充実への貢献が期待されること。

（参考）申請・認定のスキーム



基本的な考え方

- ✓国内外における国際競争力の高まる一方で、少子化が加速する中、人文・社会科学系も含めて、専門知そのものを深掘り、広げることに加え、数理・データサイエンス・AIを適切に利活用し、総合知をもって社会課題を解決できる人材の輩出が求められている。
- ✓そのためには、学士課程から博士課程までを見通した体系的な教育課程の編成のもと、各課程の学びの密度を高める必要がある。一方、現在、同一の学位レベルの連携（横の連携）を促進する制度（共同教育課程や研究科等関係課程等）は存在するが、上位の学位レベルとの連続性の向上を図る一般的な制度は存在していない※。
※ 工学分野の連続性に配慮した教育課程については平成30年に導入。
- ✓大学院レベルの課程を見据えて、学士課程を構築することは、学士課程そのものの質と密度を高めるものである。例えば、大学院固有の教育方法である「研究指導」を受ける素地を養う観点から、学部段階から、複雑化した社会において課題を見出し、解決を図る訓練をしておくことは極めて重要である。
- ✓こうしたことを踏まえ、まずは、学士課程から博士課程までの縦の連続性の向上を図るための制度の整備を図ることとする。具体的には、各設置基準の教育課程の編成方針として、学部と研究科の連続性に配慮した教育課程を編成することを明記するとともに、連続性に配慮した教育課程を編成する学部と研究科を一つの単位として、3つの方針の策定を可能とすることとする。
- ✓これは、現行の標準修業年限を前提とした各課程の教育を有機的につなぎ、その質と密度を高めることを目的とするものであり、標準修業年限の短縮を一義的な目的とするものではない。
- ✓その上で、こうした連続性に配慮した教育課程の編成の結果、修士課程において30単位以上の修得と必要な研究指導を受ける等の現行の修了要件を満たすことを前提に、（４年＋）１年以上２年未満の期間が修業年限として必要かつ十分なものであることを国として確認できる場合には、例外的に、大臣の認定により、修士課程の標準修業年限を１年以上２年未満の期間とすることなどを可能とすることとする。

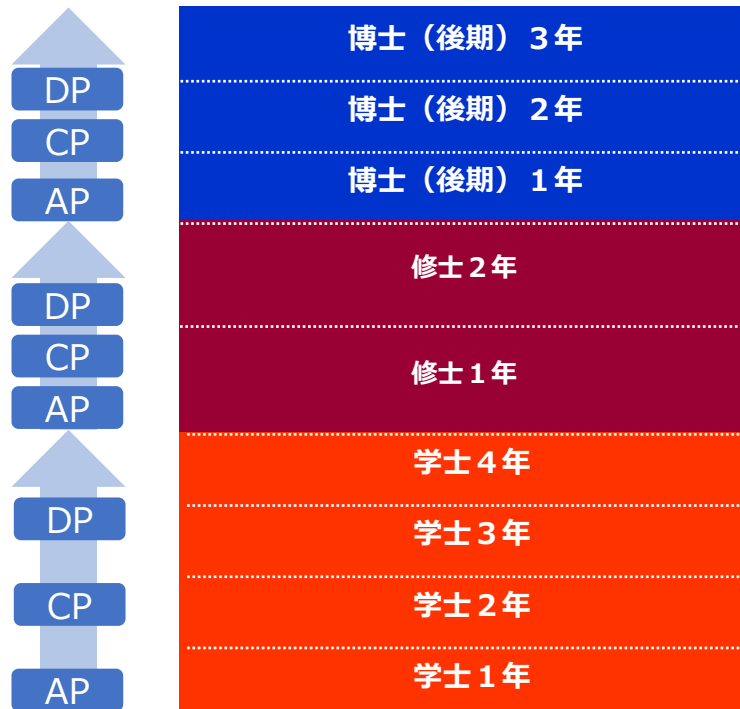
1. 学部・研究科の連続性に配慮した教育課程の編成の促進

主な改正内容

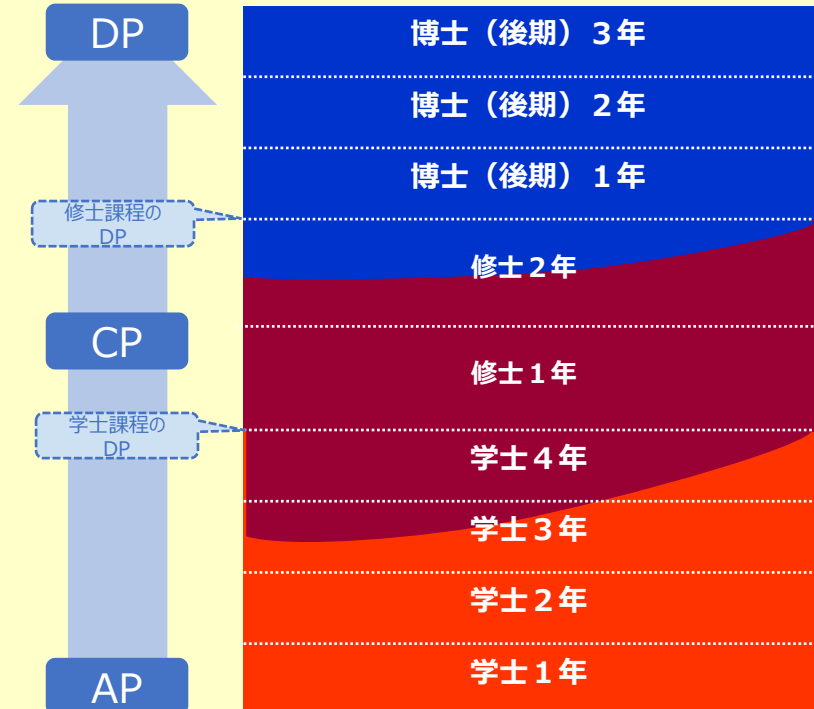
- ✓ 大学設置基準等に定める**教育課程の編成方針**において、各大学は、その教育上の目的を達成するために必要があると認められる場合には、**学部における教育及び大学院の研究科における教育の連続性に配慮した教育課程（以下「連続課程」という。）を編成することを明記**する。
- ✓ いわゆる**3つの方針**（卒業・修了認定の方針（DP）、教育課程の編成・実施に関する方針（CP）及び入学者受け入れに関する方針（AP）をいう。以下同じ。）について、**大学の実情に応じて連続課程を編成する学部及び大学院を一つの単位として策定可能**とする。
 - ※ 専門職大学及び専門職大学院についても同様の取扱いとする。
 - ※ 3つの方針については、今回の改正により、学部段階、大学院段階ごとに策定することに加え、連続課程単位でも策定可能であることを法令上新たに定め、各大学の実情に応じた策定単位の選択肢を広げるものである。なお、連続課程単位で策定する場合においても、学士課程や修士課程のDPを段階的な学修成果の目標としてわかるようにしておく必要があることに留意。

改正により可能となる3つの方針の策定パターン

※ 現行制度で策定可



※ 改正により、大学の実情に応じて策定可能に



2. 連続課程特例認定制度の創設

制度創設の趣旨

効果的な連続課程の編成に係る実証的な成果を創出し、今後の更なる制度改善につなげるため、内部質保証等の体制が十分機能していることを前提に、標準修業年限等に係る特例を認める制度を創設。

特例の要件

- 次のア及びイの要件を満たし、**文部科学大臣の認定**を受けたときは、文部科学大臣が別に定めるところにより、標準修業年限等に係る大学院設置基準の特例を認める。

ア **連続課程の編成に係る実証的な成果の創出に資する効果的な取組を行うため特に必要**があると認められる場合

イ 以下を行う大学であること

- － 当該効果的な取組を行う
- － 教育研究活動等の状況について自ら行う**点検、評価及び見直しの体制の整備**
- － 教育研究活動等の状況の**積極的な公表**並びに**学生の教育研究上適切な配慮**を行う

- **他の大学との間で連続課程を編成**する場合に係る上記の認定は **大学等連携推進法人の社員又は一定の要件を満たす複数大学設置法人が設置する大学間において協議会を設け、連携推進方針等に沿って編成される連続課程に限る**こととする。

※ 詳細は、教育課程等に関する事項の改善に係る先導的な特例制度や連携開設科目制度に倣い告示で定める予定。

※ 専門職大学及び専門職大学院（法科大学院及び教職大学院を除く。）についても同等の取扱いとする。

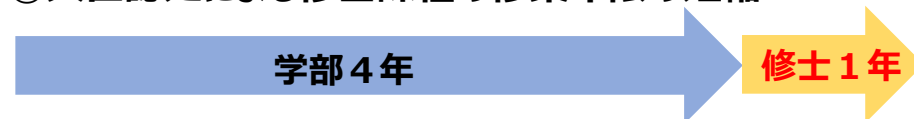
特例の効果

具体的には、以下の特例を認める。

- ① **修士課程の標準修業年限を1年以上2年未満の期間**とすること
- ② **大学院入学前に大学院の単位を修得した場合**には、**修得時の大学院の入学資格の有無に関わらず**、当該単位数を勘案した**在学期間の短縮を可能**とすること

(改正後イメージ)

- ① 大臣認定による修士課程の修業年限の短縮



- ② 大臣認定による先取り履修に基づく在学期間の短縮



スキームのイメージ



3. 施行期日

令和8年2月24日